

報 告

経済学会秋季講演会

昭和三十九年十一月二十日(金) 午後二時三十分 於 寧靜館 三十一番教室

講師 西川良一教授

演題『マーケティングの理念より何を学ぶか』

講師 岡 光夫教授

演題『日本経済史における生産力の問題』

学生諸君の研究の一助として、経済学会では毎年春秋二回の講演会を催しているが、三十九年度の秋季講演会は慣例により学内から、西川良一、岡光夫両教授にお願いして開催された。

小松幸雄部長の開会の辞にひきつづき、西川、岡両教授は熱心な聴衆をまえに講演され、最後に黒松敏教授の閉会の辞で講演会は盛況のうちに幕を閉じた。両教授の講演要旨はつきのとおりである。

マーケティングの理念より何を学ぶか 西川 良一

マーケティングの理念の歴史的な考察という意味で、A.W.

Show の論文である「市場配給における若干の問題」(Some Problems in Market Distribution—Quarterly Journal of Economics, Vol. XXVI, Aug. 1912) にして紹介し、それが、従来の配給論と、一九一〇年～一九二五年頃までの間において、どのように考え方が相違していたかについて吟味し、資本主義の独占化の様相と、それに伴うところの生産と販売の流通経路が、大量生産に對する大量販売、大量消費への結び付きについての、マーケティングの考え方を考察した。

そして、一九三〇年代のアメリカを主軸とする世界恐慌とマーケティングの質的变化を、ニューディール政策の一連の独占市場への保護的「てこ入れ」の経緯について、マーケティングの独占資本主義の高度市場への態勢としての現代的なものであるマネジリアル・マーケティングの誕生について述べ、技術的なマーケティングの内容について触れてみた。とは、いうものの、初期の所謂、マーケティングの理念としての本質は不変のものであり、変化しているものは、その技術的内容が、ますます複雑化し、洗練され、より精密化しているにすぎない点をついた。

そして、最後に、わが国のマーケティングがアメリカより紹介された過程について述べ、わが国のマーケティングは、その理論としては、マネジリアル・マーケティングとして最初の導入当時より、そのような性格をもっていたことを語り、その次に、現代の日本の企業活動も、大いに、国家独占資本主義としての性格の下における企業経営指標をもたざるを得ない立場においては、ア

メリカのそれと同様に、今後マネジアル・マーケティングの研究が、より以上に要請されつつある現状であるとして、話を結んだ。

(三九・十二・十二)

日本経済史における生産力の問題

岡 光夫

生産力とは「一定の使用価値を生産するのに、どれだけの労働を必要とするか」ということに表現されているのであるが、これを日本経済史の上に適用するのに、従来いろいろの説明がなされていた。

従って、日本の経済発展の後進性を強調し、古い労働形態によつて労賃が安い、資本の有機的構成を高めることを阻害し、土地の単位当の収穫を高めるために、惜しみなく労働が投下されるところの多肥農業が成立し、労働の生産性が全く無視されるという論者がある。また日本の古い社会関係の残存を生産力の低さに求め、西欧に比較して日本農業は、一定の小面積から多くの収穫をあげるため、労働集約となり、労働の生産性は低められ、西欧はその逆であり、常に土地の生産性と労働の生産性は、逆の関係にあるという論者がある。

今あげた処の二つの論者は、共に日本農業の後進性のある面を、鋭く衝いてはいるのであるが、共に精密な実証に裏づけられたものではない。

東洋で日本は、最も古典的社会構成をとつた国であると称せら

れているが、若しもそうであるならば、その構成が段階的に進む過程で、古い構成を破壊してゆく生産力の展開があつた筈であり、これを單に「低いのだ」という説明だけでは、解決出来ないのではないかという疑問が残るのである。

然しながら、労働の生産性を論証するためには、史料制約があり、比較的史料に恵まれた近世においても、村方史料に期待することは全く不可能であり、農書も多くは当時の文化人であつた漢学者や、村役人によつて執筆され、今後期待出来るのは経営者の精密な耕作帳と、経営者自身による農書である。その一例として、筆者の発見による八尾近郊の八尾木村の、木下清左衛門の「家業伝」を挙げる事が出来る。

八尾木村は幕末五〇%以上が綿作地であり、一町歩以上の経営には雇傭労働が入り、一八〇戸のうち三〇〇戸が富農によつて占められ、当時の日本の最先進地帯であり、木下家は三町七反一畝のうち二町四反を経営し、その半分を綿作地としていた。家業伝の執筆された天保一三年には、五人の雇傭労働をおき、銀二貫六〇〇匁の純益を得ており、労働の生産性も従来発表された綿作地の富農の二倍となっている。家業伝の記載の目的は、この二倍の生産性をあげるための、秘伝を子孫に伝えるものだと言っている。

× × × ×

第十四卷第四号と第五号の通頁が重複していますので御注意願います。